

「アリと猪木のものがたり」 村松 友視

1976年6月26日、格闘技世界一決定戦と銘打たれたアントニオ猪木とモハメド・アリの一戦が行われた。猪木が寝ころび、スタンディング・ポジションのアリの足をめがけてキックを繰り出すという、予想外の試合展開にうんざりしたことを思い出す。

本書は、プロレスの味方を自認する著者が、世紀の一戦とうたわれた一戦が、当時のメディアや世間から、世紀の凡戦として酷評されたことに対して、何らの返す言葉も持たなかったことについて忸怩たる思いを抱き続けてきたが、40年の時を経て、やっと探り当てたことを書き記したものだ。

そのキーワードは「差別」だ。世界チャンピオンに昇りつめたアリの軌跡を追ひ、アリがマルコム X と出会い、ムスリムに改宗し、人種差別と闘う象徴になり、徴兵忌避を敢行し、ベルトをはく奪され、ボクシング界から追放されるが、キシシャサでのジョージ・フォアマンとの一戦を制し、不死鳥の如くに甦る。

戦後、力道山によって一躍脚光を浴びたプロレスだが、ショービジネス的にしか評価されなかった。移民先のブラジルでその力道山に見いだされた猪木は、力道山亡きあとのプロレス界をジャイアント馬場とともに歩むが、独自のプロレス観を持ち、それを実現するために新しい団体を設立し、見世物、八百長と蔑まれるプロレス観に対するアンチとしての過激なプロレスだ。

その二人が対戦するなど、誰もが信じなかったが、紆余曲折を経て実現した。試合にはアリ側から数えきれない注文が出され、実現を第一にした猪木側はそれらをすべて呑んだ。その結果が、「世紀の凡戦」と言われる試合展開になったのは、本書を読めば納得できる。

そして、大事なことはその試合だけにあったのではなく、その後の二人の交友にもあったことを知る。それは、試合で互いを知った二人にしかわからない機微に触れるものがあつたのだろう。猪木が1995年に企画した「北朝鮮」での「国際スポーツ文化祭典」にはアリも同席していたことを知り、「ほーっ」とため息が出、何やら吹っ切れた気持ちになった。

素晴らしきかな、プロレス！もちろん、私も「プロレスの味方です」

